思考発話法を用いた風景の印象評価語に関する検討

橋爪　佳那

わたしたちは日々生活を送るなかで多様な風景に出会い、様々な印象を受ける。まちづくりの一環として地域ならではの風景をアピールする取り組みが行われている事例もあることから、人が出会った風景の印象をどのように評価するのかについて検討することは、住環境の充実やまちづくりの一助になると考えられる。

従来風景の印象評価についての研究は多く行われてきたが、その大部分は実験に用いる印象評価語を実験者が選んだものであった。そのような印象評価語では、実験参加者が抱いた印象を正確に測ることができない恐れがある。そこで近年、わたしたちが実際に抱く印象を反映できるような印象評価語を採用するために、実験参加者自身の言葉から印象評価語を抽出する方法がとられるようになってきた。その方法の１つである評価グリッド法は、あらかじめ定めた「望ましさ」などの基準によって、呈示する複数の刺激を分類してもらい、その基準のもとで評価語を抽出する方法である。しかしながら、この方法では、そのような基準によって実験参加者の発言が制限され、その基準と関係が希薄な評価語は採用されず見過ごされてしまう可能性がある。そこで本研究では、実験参加者の抱く印象にできるだけそうよう、思ったことや感じたことをそのまま自由に発言してもらう方法、すなわち思考発話法を用いることとした。

本研究では、思考発話法によって抽出した景観および音環境の印象評価語を用いて風景の印象評価実験を実施し、得られたデータから印象評価語に関する因子構造を検討するとともに、導き出された因子によって各風景の特徴について考察することを目的とした。

まず、評価語を抽出するにあたり、風景（視聴覚刺激）を景観（映像刺激）と音環境（音刺激）に分け、それぞれの印象を思考発話法によって発言してもらった。その発言のなかで出現頻度が高かったものを印象評価語として採用し、それを用いて SD 尺度を作成した。次に、評価語を抽出する際に呈示した景観（映像刺激）と音環境（音刺激）を時間的に同期させた風景（視聴覚刺激）を呈示し、作成した SD 尺度を用いて印象を評価してもらった。

得られたデータをもとにクラスター分析を行った結果、実験で呈示した風景は、比較的自然要素が多く含まれる風景で構成されるグループと、比較的人工物が多く含まれる風景で構成されるグループに分類されたため、それぞれを「田舎的風景」、「都会的風景」と呼ぶことにした。さらに、風景の印象評価語に潜在する因子を検討するために因子分析を行った結果、風景がどのくらい発展しているのかを表す「発展性因子」、風景がどのくらい魅力を持つのかを表す「魅力因子」、風景が与える心象としての鮮やかさを表す「鮮やかさ因子」の 3 因子が抽出された。続いて、因子分析で得られた因子得点から風景の特徴を検討した。その結果、「田舎的風景」の方が「都会的風景」よりも発展しておらず、魅力的な印象を与える風景だと評価される傾向がみられた。ただし、思考発話法を用いた実験において「田舎は田舎らしく、都会は都会らしくあってほしい」という主旨の発言が多くみられたことを考慮すると、単に田舎的な風景が魅力的に感じられるのではなく、それぞれの空間が持つ独自の個性や役割に相応しい風景こそが魅力的に感じられるのではないかと考えられる。（環境行動学）